第 4 回 SPARC Japan セミナー2015

「研究振興の文脈における大学図書館の機能」

概要説明

星子 奈美
（九州大学附属図書館）

星子 奈美
九州大学附属図書館eリソースサービス室リポジトリ係長。平成27年度 SPARC Japanセミナー企画ワーキンググループメンバー。2006年9月より6か月間、実務研修のためQueensland University of Technology（オーストラリア）において機関リポジトリ業務に携わる。2007年から2010年、および2013年から現在まで、九州大学の機関リポジトリ業務を担当。

SPARC Japan セミナーは、国立情報学研究所の国際学術情報流通基盤整備事業の一環として開催されています。学術情報流通等に関する最新のトピックについて、登壇者の方々と参加者の皆さまが共に考え、議論することを目的としています。

今年度の SPARC Japan セミナーはこれまでに 3 回開催し、今回がその締めくくりとなります。第 4 回のテーマは「研究振興の文脈における大学図書館の機能」です。今年度のセミナー企画ワーキンググループに参加している国立情報学研究所の蔵川圭先生、慶應義塾大学の市古みどり日吉メディアセンター事務長、北海道大学の梶原茂寿さん、そして私、九州大学の星子の 4 名が中心となって企画しました。

オープンサイエンスと図書館員・研究者

さて、昨年 3 月に内閣府の報告書「我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について」が発表されて、ほぼ 1 年が経過しました。その後、オープンサイエンスを扱うイベントが数多く開催され、各機関によるオープンアクセスポリシーの採択が相次ぐなど、まさにこの 1 年は日本におけるオープンサイエンスの大きな転換点であったと言えます。

従来、図書館員と研究者との関係は、サービスの提供者とその受け手でした。オープンサイエンスを実際に運用していく上でも、図書館員が所属機関の研究者を支援すべき局面はあると思います。その一方で、研究内容を広く開示し、社会に貢献するというオープンサイエンスの理念から考えれば、図書館員と研究者は共に提供者の側に立っていると言えます。図書館員の果たすべき役割は何かという本質的な問いについて、研究機関、日本、そして世界全体と、複数の階層から考えることにより、オープンサイエンスにおける図書館員の立ち位置がより明確になるのではないでしょうか。その上で、日本における研究振興の方策について具体的に構想したいというのが、本日のセミナーの趣旨になります。

講演・パネルディスカッションについて

「オープンサイエンスの潮流」という言葉を最近よく聞くようになりましたが、本日はその大きな波の中

で船を進める図書館員にとって、遠い彼方まで照らす灯台のような講演者の皆さまにお越しいただきました。

東京大学附属図書館の尾城孝一事務部長には、大学図書館等での豊富なご経験を基に、今後の大学図書館が取り組むべき新たな研究支援活動についてお話しいただきます。

京都大学図書館機構長の引原隆士先生が京都大学におけるオープンアクセスポリシーの採択を強く牽引されたことは皆さまご存じのとおりですが、本日は、研究者、そして図書館関係者というお立場から、図書館員に対するご意見を頂きます。

内閣府の真子博様には、内閣府による報告書の概要とオープンサイエンスの推進に関する取り組みのフォローアップ状況をご紹介いただきます。

九州大学の前総長である有川節夫先生には、附属図書館長の時代から私たち図書館員をいつも力強くご指導いただいています。本日は、大学図書館の機能の変化とそこに求められるものについてお話しいただきます。

各ご講演後のパネルディスカッションでは、企画ワーキングの市古さんをモデレーターとし、講演者の皆さまによる濃密なご議論を拝聴できることと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。